

相馬御風
生誕140年
140th Anniversary

四季折々
の
御風さん

No.

4



「心ざわつく春祭り」

なれぬ手に 播きし種さへ ををしくも
土をもたげぬ 来て見よ吾子等

「まさのぶ、あきら、来てみ！父ちゃんのまいた種が芽を出しそうだ！」

雪を頂ける山並み、眼前に広がる日本海、このロケーションで春に芽吹く小さな生命。これがどういう意味をもっているか、いずれ分かるよ。

これこれ、子どもたちにはこういう体験をさせてやりたかった！

大正5（1916）年、家族そろって糸魚川へ帰住してきたばかりの頬つぺたを赤くした父ちゃんの心の声が聞こえてきそうです。

そういう御風さんも、当然少年時代がありました。色白で痩せ、内気で一人遊びが好きな泣き虫少年。でも、春祭りの興奮は別物です。

非日常の雑踏のなかでのワクワク。喧噪、興奮の天津神社けんか神輿。その後の荘厳な舞楽では、稚児納首利、破魔弓等の稚児舞楽の舞手を務めました。

桜花散る舞台上で華やかな衣装に袖をとおし舞う誇らしさと喜び、そしてその前の練習の厳しさ。

天冠は 坊主頭に痛しとて
泣きて叱られき この拝殿に

一ああ、金属製の冠が坊主頭にチクチク痛い」と泣いちゃって、叱られたなあ。

あとあれ、祭り独特の見世物小屋。怪しげな呼び込みと看板、おどろおどろしい雰囲気、友だち連中に怯んだ姿は見せられない！と、意気込んだけども、あの怖さはずっと忘れられないよ…。

この宮の 祭り日にして ろくろ首の
見世物を見き 今も忘れじ

今も昔も子どものどきどきポイントは変わらないのは面白いですね。

次号へつづく >>

問合先 文化振興課 文化行政係 ☎552-1511

4月11日（火） 5時のチャイムが 「ふるさと」に変わります

御風著「静に思ふ（昭和21年）」に収録。曲は御風没後に飯吉亮一氏がつけました。

御風の原題には「ある復員者に代りて」と副題があり、もともとは戦地から引きあげてきた復員者の代弁的立場で作詞されたものです。

		三		二		一	
や	あ	友	こ	ふ	ふ	な	す
わ	た	の	み	る	る	ご	こ
ら	た	手	あ	さ	さ	や	や
か	か	を	ぐ	と	と	か	か
く	く	る	の	の	の	に	に
		土	な	土	友	母	父
		友	を	は	は	は	は
		は	に	み	ど	ま	ま
		あ	ぎ	は	ろ	ま	ま
		り	だ	な	な	し	し
		り	の	な	な	け	け
		り	つ	つ	つ	り	り
		り	み	か	か	り	り
		り	こ	し	し	り	り
		り	し	し	し	り	り
		り	み	み	み	り	り

ふるさと

作曲 飯吉亮一
作詞 相馬御風